

つまり、「奏著書」からは劉邦が功臣を列侯として封建するにあたり、その一族をなかば人質として自身のそばに留め置くと同時に彼らに関内侯を賜与していたという状況を窺い知ることができる。総じて、これまで封君の総称であった「關内侯」は、前漢成立以後に第一九級関内侯として二十等爵制中に定着し、それは『關内』に居住する侯」としての意味を持つようになっていった。楚漢抗争期において軍功によって序列化された「侯」号・「君」号は、こうして二十等爵制の最上位である列侯・関内侯として転化したのである。

しかし、前漢後期、とりわけ第九代宣帝期以降、関内侯は功績のない者に対しても賜与されるようになっていく。例えば、第一一代哀帝期の官僚・平当は建平二年（前五）一二月に丞相に就任し、即日列侯に封ぜられる予定であったが、時期が冬であったことによつてひとまず関内侯が賜与され、翌年春の封侯前に病死している。こうした平当に対する措置は、当時の封侯儀礼を規定していた「漢家故事」と呼ばれる礼制に基づくものであったが、その中で封侯予定者に関内侯が賜与されたのは、翌年春に行われる封侯に備えて彼らを長安に留め置いたためであった。つまり、当時の関内侯は『關内』に居住する侯」としての性質を保持してはいたが、それは前漢初期とは異なり、礼制の中で封侯儀礼の一要素として機能していたと考えられるのである。そして、こうした爵制と礼制との結びつきは、前漢を篡奪した外戚の王莽が列侯を「公・侯・伯・子・男」の五等爵、関内侯を「附城」と改名するに至って一気に表面化した。王莽

による爵制の改変は、二十等爵制を礼制によって理念化し、前漢初期以来、引き継がれてきた爵制の性質を一変させるものであったのである。

このように、関内侯は、前漢建国とともに『關内』に居住する侯」として成立し、それは当初は軍功に対する報奨として用いられたが、前漢後期以降、礼制との関係を強め、最終的には儒教經典に見える「附庸」として完全に理念化した。こうした関内侯の変遷過程は、二十等爵制そのものが軍功に基づく秩序から礼制に基づく秩序へと変化していったことを物語っていると見える。従来、爵制は前漢後期以降、徐々に形骸化していったとされているが、爵制が上記のような変化を辿ったのであれば、国家が爵制と礼制とをあえて結びつけようとした意図を探る必要がある。本発表では、関内侯という一爵称を材料としたケース・スタディを通じ、上記のような二十等爵制研究の展望を提示した。

韓国木簡の用途と製作方法

橋 本 繁

城山山城木簡はこれまでの研究により、五六〇年頃に洛東江上流域の各地から城山山城へ稗や麦などの物資を輸送する際につけられた荷札であることが明らかにされている。当時の地方支配体制と密接な関わりのあることが指摘されており、急速に国家体制を整備し

た六世紀新羅の領域支配を明らかにするための画期的な資料といえる。しかし、これまでの研究は、書かれた文字についての研究に偏っている。木簡がどのように作成され、使用され、廃棄されたかについてはほとんど明らかになっていない。文字分析と合わせて、モノとして木簡を観察することによってこそ、文書行政の具体的様相を明らかにすることができると考えられる。本報告では、実物調査によって得られた成果にもとづいて、城山山城木簡がどのように製作され、所蔵され、廃棄されたのかを明らかにしたい。

観察した五八点の城山山城木簡のうち、一八点で樹皮が確認された。樹皮は原木の外周であるので、木簡の幅がそのまま原木の直径となる。これら樹皮の確認される木簡は、おおよそ直径が二センチほどの細い枝を加工してつくったものであることがわかった。また、樹皮はのこっていないが髓のあるものも七点確認された。樹皮が確認できないことから材の正確な大きさは不明であるが、おおよそ二〜四センチほどの大きさの枝から作成したと考えられる。これら樹皮や髓のみられる木簡が、城山山城木簡の約半分を占める。

木簡の観察によって推測される、木簡を製作し文字を書いて使用するにいたる手順は次の通りである。

①直径二センチほどの松の枝を採取する。②枝の中心に刃を入れて縦に割る。③外側の樹皮を剥ぎ、刃物で書写面を調整する。内側も荒く調整を加える。④上下端を切断して適当な長さにする。⑤切込みを入れるか穿孔を開ける。⑥文字を書く。⑦荷物に縛り付ける。

順序は多少前後する可能性があるが、おおよそこのような加工によって作成したものと推定できる。

このような技法で木簡を加工した製作者と、その木簡に実際に文字を書いた書写者とは、異なる可能性が高い。文字を書いた面をみると、丁寧に調整した外側ではなく、ほとんど調整をほどこしていない内側に書いた例が四点ある。もし木簡が必要な時にその都度木簡を作成したのであれば、調整していない面に文字を書くとは考えられない。したがって、木簡の加工者と書写者は異なっていたものと推測される。木簡が必要となることに作成していたわけではなく、ある程度まとめて作成して保管しておき、必要に応じて使用したと推測される。

次に、木簡がどのように使用され、廃棄されたかを検討していきたい。城山山城木簡のような荷札は、荷物につけられて使用されるもので、税の貢進を勘検すなわちチェックするために使用された。勘検が終わったあともつけられたままで保管されたと考えられる。そうした状況をよく物語るのが二点の木簡で確認された鼠の歯形である。木簡が稗や麦などの穀物につけられたまま保管されていたため、鼠に囓られたのであろう。

廃棄に関してであるが、稗や麦など荷物が消費される際に、付けられていた荷札は不要となり廃棄されるものと考えられる。城山山城木簡の大部分は、完形のものであるか、上下端が欠損しているものも埋蔵時もしくは出土時の破損で、意図的な廃棄痕はほとんど確

認められなかった。例外的に使用当時に折れたと確認されるのは二例のみである。文書木簡であれば、木簡の一部を書き換えて悪用されることを防ぐためにシュレッターのようにして廃棄する例がみられるが、城山山城木簡のように記載内容の単純な荷札は、そのような必要もないため、そのまま廃棄されたものと考えられる。

城山山城木簡は、樹種はマツで、小さな枝や幹を加工したものが多数ある。ただ、同じ地域のもので、枝から作ったものもあれば、柱目・板目のものもみられることから、そのときどきに入手できた材料を使って木簡を作成したものと考えられる。こうした検討を重ねることによって、新羅でどのように文書行政が行われていたかの全体像を明らかにしていきたい。

イラン立憲革命期シーア派説教師の自由と平等

— ジャマール ロッディーン・ヴァーエズ・エスファハーニー —

大足 恭平

イラン立憲革命の主導思想については、その近代性に重点を置く立場と伝統性に重点を置く立場からさまざまな検討が行われてきた。特に立憲革命におけるウラマーの果たした役割を巡る論争は、特にイラン・イスラーム革命勃発後に多様な展開があった。これはイラン・イスラーム革命によって成立したイスラーム共和制・法学者の統治という特異な体制を歴史に求める際、もっとも対照的に分析し

うるのが立憲革命だからである。このような視点の研究としては、アブラハミヤンやケディエによるものがあるが、いまもって解決を見ていない論点がさまざまにある。

本発表は、立憲革命期の説教師としてもっとも著名なひとりセイイエド・ジャマール ロッディーン・ヴァーエズ・エスファハーニーがどのように「自由」と「平等」を説いたのか、という観点からイラン立憲革命におけるイスラームと近代思想の接点を探ろうとするものであった。

セイイエド・ジャマール ロッディーン・ヴァーエズ・エスファハーニーは一八六二年、ハマダーンのウラマー一家の生まれ。父親を早くに亡くし、母が姉妹の家に世話になるためテヘランに移る。二十一歳の時に学業をつづけるためエスファハーンへ。ここで西洋啓蒙思想にふれ、州政府当局に対する批判を繰り返す。また友人らとともに教育にも携わる。太守はおそれてテヘランへ追放。結果的に一九〇五年前後、立憲運動がもっとも盛り上がるテヘランにおいて、アジテーター的役割を演ずることになった。やがて小専制の反動があると逃亡中に逮捕。一九〇八年、処刑された。もっとも早い時期の自由の主張者として現在でも尊敬される。

ヴァーエズ・エスファハーニーの説教は非常な人気があり、一〇〇人以上の聴衆を集めることもあった。内容は常にコーランからの章句を引くなど伝統的・宗教的辞で説教をはじめ、エマーム・ホセインとその親族、友たちの殉教の苦痛への言及をして説教を終え